



車を買いかえることにした。以前は荷物がたくさん積めるミニバン型が便利だったが、子供たちが独立すると、大容量の車はいらない。コンパクトで手ごろな大きさのものを選んだ。新車をみて一番驚いたのは安全機能の充実ぶりである。バックモニター、サイドモニター、ヘッドライト自動点灯、追突回避。とくに、高速道路で使うオートクルーズでは、定常速度でセットすると、道路のアップダウンに関わらず速度は一定で、先行車に近づくと勝手に減速する、道路両側の白線ラインを読み取りハンドル操作までしてくれる。これってほとんど自動運転じゃないのか。でも、ちょっと待てよ。これらの機能は安全走行のための技術だったはず。でも使っているうちに、「頼って当たり前」になりはすまいか。安全機能に頼りきりになると、自分の運転技術や反射神経が退化していくような気がする。安全機能という道具が、使う側の人間の反応を規定してくるのだ。

▼ゴンドラ猫の実験

1960年代に通称「ゴンドラ猫」という実験が行われた。歩けるようになったばかりの二匹の子猫を毎日ある装置の中に入れる。片方の猫は自分の足で歩けるが、もう片方の猫はゴンドラ(吊り上げ足場)に固定され、自分で歩くことができない。二匹は棒の両端に繋がれ、棒の中央は固定されグルグル回る。歩ける猫とゴンドラ猫は、互いに点対称の回転運動をするような仕掛けになっている。つまり、二匹の猫の見える景色は全く同じで、唯一の違いは、自分の意思で歩けるかどうかだけである。その後二匹の猫はどうなったのか。自分の足で歩ける猫は装置からはずしても自分でちゃんと歩けた。だが自分で歩けなかった「ゴンドラ猫」は、ものにぶつかったり、障害物を避けられなかったり、ちゃんと歩けないのである。この実験から次のようなことがわかる。動物が空間を認識する能力というのは、視覚情報だけではダメで、身体を使った能動的運動とセットではじめて完成する。視覚と運動という、一見関係のない二つの機能は、互いに切り離すことができないのだ。ゴンドラ猫の実験は、「世界は、自ら能動的に働きかけることで、はじめて認識できる」ということを示している。

▼自動運転の危うさ

このゴンドラ猫は、どこか車の安全機能に頼る人間と似ていないだろうか。多くの情報が自動処理されより安全になる。その一方で、安全装置に任せることで、人間が本来身体を能動的に使って体験する感覚が鈍くなり、大事な身体感覚が忘れられていく。禅では、言葉や情報でなく、身体そのものを使うことが勧められる。ブルース・リーが、燃えよドラゴンで「Don't Think, Feel.(考えるな、感じよ)」と言うのは、たぶん当たっている。「身体知」のようなものが人間には確かにあるのだ。車の安全機能の進化、その先にある自動運転は、そういう身体知の経験を奪ってしまう恐れがある。もしかすると、あえて過剰な安全装置を使わない処し方もあっていいのではないか。



鳥取大学医学部
地域医療学講座
教授

谷口 晋一
(たにぐち しんいち)